The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エッセイ ： 生の欲と規範
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 199-201
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79263
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集５　第２回　臨床哲学フォーラム（規範の外の生と知恵）
テーマ：BDSM をめぐる生の営み――ケアとは何か？

【エッセイ】生の欲と規範

堀江　剛

BDSM（あるいは SM）にそれほど関心があるわけではない。いや、もしかすると少しは関心があったのかもしれない。関心を持とうとしなかった、関心を持つことをどこかで避けていた。そこに惹かれてしまう自分を想像して、その自分を怖がっていた。この辺りが、正直なところである。

そこには、単純に「関心がある／ない」では処理しきれない何かがある。誰にでも、食欲と同じように性欲がある。誰もが「異常なものを想像する欲」というか、何かそこに惹きつけられるものを感じている。また同時に、そうした「生の欲」に対する怖さや忌避する感情もある。そこに触れる事柄を、単なる「関心」の問題で済ませてしまうことはできない。今回「臨床哲学フォーラム（規範の外の生と知恵）：BDSM をめぐる生の営み」に参加して、自分の中にある「生の欲」と社会の中にある「規範」とのせめぎ合い、その間の割り切れない葛藤というものを感じざるをえなかった。この点を中心に、感想を述べてみたい。

拘束・調教・支配・服従・加虐・被虐、これらの言葉、これらの実践を、一つずつ想像してみる。相手を身動きできないように、縄などで縛る。縛ることに、また縛られることに、快感を得る。誰かを、自分の命令通りに振る舞うよう教え込む。命令は絶対で、どんな酷いこと・恥ずかしいこと・理不尽なことでも、従わなければならない。いわゆる「聖水」を飲むことでも、また「黄金」を食べることでも。それが繰り返され、いつしかご主人様・女王様の命令を待ち、請い求めるようになる。ムチで相手を叩く。痛い。痛さが、痛さに耐えることが、やがて快感に変わる。それは「愛のムチ」である。相手を侮辱するような言葉を、これでもかと浴びせ、貶める。罰を与える。言うことを聞かなければ「お仕置き」が待っている。しかし、お仕置きを、不安と期待が入り混じる中で、待ち望む。それは「ご褒美」でもある。

快／苦、愛／憎、尊敬／侮辱、拘束／解放、歓喜／悲痛、あらゆる感情が入り混じり、両極化し、反転する。衝動（リビドー？）として自らの生を賭け、あらゆる感覚・感情を活用したプレイが繰り広げられる。それは「力の交換」でもある。ここにあるのは、様々な性癖・妄想を含めた「生」の多様性・解放である。小西さん、ほんまさん、河原さん、そして「女王様」観菜月らみぃさんの発表を聞いていて、まずはそれを感じざるを得なかった。

他方、これらの営みは「社会」にとって、何かしら怖いもの・変なもの・遠ざけておきた

いものである。自分自身の意識・無意識の中で、あるいは社会の諸制度の中で、私たちはこうした営みを「検閲」し「抑圧」してもいる。要するに、それをおおっぴらに実践するわけにはいかないと感じる。しかし、なぜだろうか。なぜ、上に書いたような多様性・解放を、社会で公然と実践できないと、私たちは感じてしまうのだろうか。とりあえず、確たる理由も定かにできず、人はそう感じてしまう。それは「道徳規範」なのだろうか。それは、知らず知らずのうちに、社会が私たちの心に植え付けた「普通・正常 normal」という枠組みなのだろうか。そのような、私たちの心の中や社会にある制御装置なのだろうか。

社会は古くから「禁忌」（タブー）という領域を形づくってきた。そこには、誕生と死、性や暴力などに関連するものが多く含まれており、よく言われるように「両義的」な性格を持っている。つまり、惹きつけられると同時に怖がられ、欲するがゆえに遠ざけられる。禁忌に触れる行為・営みは、おそらく社会の中で、避けられると同時に、どこかで冒され・許される場を持ち続けてきたのであろう。社会（とりわけ古代や中世の宗教や政治権力）は、人々の「惹かれ・怖がる力」を（秘跡や神話などによって）象徴的に活用した。王こそが、禁忌を犯すことのできた唯一の存在であり、それゆえに人々の「生」を左右するような「権力」を所有することができたのである。禁忌は、人々の行為を規制するという意味で「規範 norm」の一種である。しかし、それを活用する「力」の観点からすると、単純に「いけない・良くない」行為を排除する社会機構であると考えるわけにはいかない。むしろ「普通・正常 normal」と「異常 a-normal」との境界を指し示すことによって、社会の中で何らかの「力」を働かせる機構である。少なくとも古代や中世の社会は、禁忌の「欲するゆえに禁じる・禁じるゆえに欲する」という両義性の力を、より広範な「社会の力」（例えば治水事業や戦争）へと変換する技術を持っていた。

ところで、近代以降の社会に登場したいわゆる「生権力」は、こうした禁忌の力に対して、新たなタイプの規範を覆いかぶせてきた。フーコーが指摘するように、生権力は、個別の生に対する直接的介入とは別に「集団・人口 population」という観点から、科学（生物学・統計学・医学・衛生学・疫学・都市計画・建築学など）の知見を活用し、人々を「健全に」生かそうとする力である。粒の揃った労働力・高い生産性を総体として実現するために、社会が導入した新たな力の機構である。そこでは、従来の禁忌を「健全性」の下で制御しようとする、別の規範が組み込まれる。禁忌に触れる行為・営みは、「病理化」を通して「普通・正常」および「健全性」へと方向づけられる。その分だけ、誕生と死・性・暴力にまつわる問題は、より複雑な様相を呈する。つまり、両義性に揺らぐ禁忌の上に、その禁忌自体が「正常／異常」あるいは「健全／不健全」な行為・営みなのではないかという煩悶、そのような揺らぎが加わるのである。

現在の BDSM の実践者たちは、こうした規範上の、いわば二重の揺れに晒されている。その中で「生」の多様性・解放を展開しようとしている。それは、どのような場においてな

のか。どのような社会的空間の中で、冒され・許されうるのか。ここで私に思い浮かぶのは「プレイ」という言葉である。SM は「SM プレイ」として、現代社会の中で生き続けている。河原さんの（今回の発表とは別の）論文にも「遊戯」という言葉が出てくる（河原梓水「病から遊戯へ：吾妻新の新しいサディズム論」、井上章一・三橋順子編『性欲の研究：東京のエロ地理編』平凡社、2015 年、262-269 頁）。社会の中で、それを「プレイ」という形で他の実践領域と区別し、境界を作り、一定の居場所を確保しようとしている。BDSM のスローガン「SSC」（安全・正気・同意）も、普通・正常・健全性を建前とする社会の中で、何とか折り合いをつけ、自らの実践の場を保とうとする工夫である。

もちろん、BDSM が「プレイ」として自らを限定し「SSC」を実行するとしても、それで「社会の中で受容されるようになって良かったね」「もっと受容されるようになればいいね」といった単純な話にはならない。そこには、おそらく BDSM が本質的に持っている「生への欲」として、常に、境界を作りつつも境界を越えようとする、自らを限定しつつも限定を解除しようとする衝動が潜んでいるからである。プレイに踏みとどまりつつ、プレイから逸脱しようとするプレイ。生の欲と規範とがせめぎ合う場。これが BDSM の姿なのであろう。